

デジタル田園都市国家構想実現会議（第12回）提出資料

若宮 正子

図書館を地域の「知と情報」のハブに

・地理的な制約、年齢、性別、障害の有無等にかかわらず、誰もがデジタル化の恩恵を享受することで、豊かさを実感できる「誰一人取り残されない」社会の実現を目指した取り組みについては、この数年間で延べ一千万名がデジタル機器講習（主としてスマホ操作指導）を受講しているという輝かしい足跡を残していると思います。

これは最早国民運動になりつつあります。

しかし、「スマホの操作手順」を学んだだけでは、日進月歩、いや秒新分歩のIT時代を生きていくには不十分と言わざるを得ません。

・一方、空前絶後の少子高齢化時代を「高齢者が尊厳をもって生きられ」「高齢者介護が国家・社会に過剰な負担」にならないようにするためには、高齢者の自立支援が重要なカギとなると思います。

わが国では「高齢者支援」は「介護認定」と直結していますが、それ以前に「自立支援」があるべきと考えます。

・一方、デジタル機器の分野では「AIスピーカー」「スマートウォッチ」「VR機器」など高齢者の自立支援に役立つような機器がありながら多くの高齢者はその存在すら知っていません。さらに、その他の家電製品（テレビ・洗濯機等）、身の回り製品への「高齢者支援のための新しいテクノロジーを駆使した付加価値」を付

けることが可能でありながらそれに役立つ多くの製品が生まれているとはいいいがたい状況です。

要するに、急速に高齢化が進んでいる我が国でありながら「高齢者自立支援対策」が不足していると思います。

・まずは「AI スピーカー」「スマートウォッチ」「VR 機器」などを高齢者に「見てもらう」「触れてもらう」「試してもらう」機会が必要です。このような機会があれば、高齢者に「テクノロジーの進化のすごさ、ワクワク感」を知ってもらうことができると思います。

・もし、町のどこかで、そういった機器が見られる、ボランティアなどの協力を得て試してみることもできる場所があるとすれば、それは図書館ではないかと思っています。

理由は、市町村の施設として必ずあって、誰もが、いつでも（休日や、時には夜間も）予約なしに訪れることができる唯一の場所だからです。

そして「図書館」は地域の「知と情報のハブ」であるべきだからです。

図書館は昭和の前半には「無料で本を貸してくれる場所」でした。昭和の後半になると「CD、DVD」などの視聴覚教材の貸出もしてくれるようになりました。

今後は、ここに各種のデジタル機器（「AI スピーカー」「スマートウォッチ」「VR 機器」のほか「ドローン」「3D プリンター」等も加えて）を展示していただければ高齢者に限らず、子どもや一般市民の IT リテラシー向上にも役立つと思います。

しかも、図書館には「司書」という専門家が常駐しておられることが多いのです。

IT 時代、司書の方に IT 機器の使い方の指導をしていただければ更に喜ばしいことです。

「読書指導」についても、例えば「藍染」について知りたい人には「書籍ではコレコレ、Youtube ではコレコレを見てください。さらに VR で模擬体験もできますよ」と教えてもらうこともできます。

そういう意味でも「図書館」は今後、さらに重要な存在になるべきで、その一環としての「デジタル機器活用指導」をぜひ、司書の方へお願いしたいと思います。もちろん、司書ばかりに委ねるのではなく、デジタル推進員、ボランティアの方、学生、第二の人生を始めるヤングシニアの協力を得ることも大切です。

また、今後新設する図書館へは個別指導や小規模集団指導をするための「小規模な集会室」を設備していただければ、更に喜ばしいことだと思います。

更に、図書館カードに代えて図書館の「入退出」「予約・貸出」等の手続きはすべてマイナンバーカードで行うべきと思います。

以上